「あッ危ねえ」

銭形 の平次は辛くも間に合いました。 夜桜見物 0 帰 りも絶えた、

両 国橋 0 中ほど、 若 い二人の袂を取 って引戻した 0 は ほ んとう

に精一杯の仕事だったのです。

「どうぞお見逃しを願います」

「 ど っ こい待ちな、 -そんな身投げの極り文句なんか、 素直

聞いちゃ居られねえ」

「死ななきゃならないわけがございます。 どうぞ、 親 分

争う二人、平次は叩きのめすように、橋の欄干に押付けました。

が切れて叶わねえ、 頼むから静かにしてくれ。 意見をするのが面倒くさくなると、 俺は横山町 か ら駆 け 付 けたんだ。 息

を縛 って欄干 に 晒<sup>さ</sup>ら し物にする気になるかも知れないぜ」

親分さん」

解ったよ。 三百八十両 の大金を巾着切にやられて、 主人へ の申

訳、 言い交した女と 一緒に、 ドブンとやらかそうという筋だろう」

「えッ」

「お前は、 増<sup>ま</sup> 屋ゃ の養子徳之助、 こちらはお富というんだって

ねー

「そう言う親分さんは?」

「神田の平次だ」

「あッ、銭形の--

ました。 薄 明 徳之助とお富は、 り 中に、 江戸 第 死ぬ筈の身を忘れて、 一番 0 御 用聞と言わ 町 れ た の家並に傾く桜月 平 次 の顔を見直

中だ。 Ш 帰 ようなものの、 横 で夜桜を眺め 行ったか、 ったお前 山 かく、 町 いずれは心中ものだろうと思ったが、永代へ行ったか両 · の 店 が、 近間 それとも向島へ遠走りをしたか見当が からの使いで飛んで行 て居るぜ、 これが永代へでも伸された お富と牒し合せて飛出 の両 玉 へ駆け付 危ねえ話だ」 けて、 って見ると、 したと 幸 日に 11 間 いう騒ぎの に合 や、 今頃は三途 った つ か から ま 一 度 ねえ、 つ さ 店 4 玉

そう言う平次の言葉を聞いて、

す。 ٤, 二人はゾ 三途 Ш ッ と 襟<sup>ぇ</sup> の夜桜が、 をかき合せました。 あまり 気味の 助け 11 11 P ら ń 0 で た 今に は な な か つ つ 7 見 る で

も気 りや 旦那 一さア行 0 e s 一毒な程 (J 三百八十両 が こうぜ、 の気 -と居たり起ったり、 の揉みようだ」 のことも忘 店じゃ皆さんも大心配 れ て、 神 :棚に燈 徳之 助に若 だ。 明をあげた わ b け て 0 り、 b 事 増 が 見る な 屋 け 0

まな 訳 いことがございます」 もご ざいま せ 私 はこ 0 まま店 ^ 帰 つ 7 は

「はてネ」

ひ しがれて、 月 三の年、 明 り 僅 濡れでもしたように、 親を喪った徳之助は、 か 残 る 欄ん 干がん にも たれたまま、 しょんぼ 遠縁の増屋に引取られて、 りと語り続け 徳之助は ました。 に打ち 養

*p'* 思わ 素直 ぎで まる て増 して 子分で二十一まで働きましたが、 そ 主 腹 れ 屋 に 一ぺんに 0 許 る、 上 人の三右衛門 つれ 0 敷居を跨な 中 では、 て、 て 今日まで内証 と言うの は 知れたら、 朋貨 輩い < 許し れ ぐ な は でした の 0 許 は、 てく e s にし 妬も かも解らず、 他 してく れな が どうも遠慮 0 て居た、 激 奉公人の手前、 しく、 れるでしょうが、 いだろうと 増屋の主人三右衛 しなけ お 富 三百八十 いずれにしても、 ع 主人の三右衛門も れ の仲が、 -こう言うのです。 ばならな 両 番頭手代 0 門 大 この心中騒 金を失っ 二人揃 慈愛が e st は、 ように 7

る 主 うも 心 0 そ 中 平 あ 人に安心させる は りま は は 損 П いずれ 11 を酸 せん。 応尤もだが 0 顔を、 は っぱ 知 く れ 0 メ が、 ずに済ま して 金は 説き勧 メと元 何よりの孝行というものではないか」 働 ねえだろう。 ( ) の店 めますが、 て返す折もあるだろうし、 へは持って行く気にな 若くて一徹な二人は 店 ^ 帰 って、 大恩あ

て相 そ れ では て 見ま 私のお父さん し よう か は、 すぐそこ の 浜 町 に お ります。 行 つ

よう 奉公人 お富 に 5 はこう言うのです。 は か 一種 な 相違ありませんが、 娘で、 の情緒を醺 徳之助と並 し出さずに ようやく十九 女隠居 べ ると、 は の 居ません。 相 歌 に 手をし な 舞 伎 つ た 芝 居 ば 7 ( ) か 0 道行 る可 **9**, 愛ら 増 屋 0

着て、 垢 そ の 死出 象徴 は の 晴着 K 11 見えて、 帯 11 が 0) つも 店 黒 平 では心 ŋ 11 次 髪 で ર્ષ の しょう。 目には 配 水 て ^ 薄化 危 b ( ) る つ 火 粧 だろう」 か ^ に、 しく b飛込 てならな 一張な み そ 羅う う 5 な、 11 ので 11 純 仙 た。 を

親 平次はまだ、増屋の大騒ぎが目に見えるような気がするのです。 分 横山町 へは、 あっしが一と走り行って来ますよ。

を浜町へ連れて行っちゃどうでしょう

次 月 の子分、 の 隈s の中から、 ガラ ッ 八 長い長い影法師を曳い 0 八  $\mathcal{H}$ 郎 の忠実な姿でした。 て 現れ た 0 は、 銭形

お父さん」

開 けて下

さ 4 な、 お父さん」

誰だい」

私よ、お父さん」

お富 はそ っと入口 0 戸 0 隙<sup>t</sup>きま に 顔を当てま

にも、 · 1 たまり兼ねて起出した様子、――火打鉄の音や、何処の狐が化けて来やがったんだ、畜生」 憤々たる怒り はよく 判ります。 プ ンと匂う硫黄 荒々 足音 包

「そん な事を言 わな いで、 お父さん」

まま逃げ出 富 は やるせ しでもするのを惧 な 11 様子でした。 れるように、 幾度 も幾度も 振返って後ろを見 徳 之 助 が

るのです。

を掻か しまっ お店 たぞ、 から しやがって さ 馬鹿野郎。 つ き番 頭さん 死 ぬ が 来 なら勝手に死ぬ て、 手が対え の 不 が 得 4 は 11 み 親 W に にまで恥 聞

7

彦兵衛

は

言うだ

け

0

ことを言

うと、

娘

と徳之助を暁闇

0

残

だし

ま 負 つ そ う言 ょ た Ŧi. ŋ は e s な 頑がん 配 が 固に 5 屈強な親仁、 徹なので界限 内 からガラリと戸を開 左官 に 知られた顔です。 の彦兵衛 といえば けました。 仕 事

は て お父さん 本 お 父さん、 当 死 0 ぬ そう ところへ つ P 11 りだ わずに、 帰 つ た つ て来たんです」 0 相談に乗って上げて下さ を親 分さんに 助けられ 41 ` 私 達

お 富 はそう言 つ て、 後ろ に 立 つ た徳之助と、 そ れ か ら、 銭 形 0

平

次を見や

りま

た。

娘 0 沈 ん だ 声 P, 打ち 萎ょ れ た 様 Ŕ 彦兵衛 0 怒 ŋ を め る 由 は

なかったでしょう。

「お父さん」

「主人の養子 をそそ 0 か て、 三百 八 十両 0 大 金を持 出 さ せ

うな、 そ  $\lambda$ な娘を俺 は 持 つ た覚 えは ね え

お父さん そ れ は、 違 11 ますよ。 三百八十 両 は で巾着に 切り 15 取 ら れ

店な 島 黙 持込 帰 ら な つ た ん 61 で、 か 0 0 は 本 巾 薄 所 着 暗 切 で 日ょ < に 刻っ な 取 前 つ 5 て に れ 受取 か る らだ 奴が つ た つ あるも て言う 金 を、 0 わ か ざ Þ ` な わ ざ 11 花 そ か 0 時 向

お父さん」

10 さ 関か ア わ 帰 る 2 7 < 縄を れ。 附け 俺 まで て 突き出さ 泥 棒 0 仲 な 間 に 11 さ 0 が れ ち せ Þ め 7 売 は り 込 親 0 慈 だ 顔 悲

したまま、没義道に戸をピシリと――

5

飛

び

付

11

7

引

摺

り

込

W

で

つ三つ

横

つ

面

を張り

飛

ば

そ

そ の戸 な半り 分閉 め か け たまま、 銭形 次に 押えられました。

何 を Þ が る 6 だ

彦兵衛 は 少 中 ッ 腹 で た

彦兵衛、 俺を忘 れ は ま なし

平次だ、 久振 りだ つ た

あ ッ 銭 形 0 親 分

か ては浅草 残 る 月 光 光 で左官を りに 透か して いた彦兵 て 左官 衛、 の彦兵 飲む、 衛 は 打 仰 天 の道楽が嵩い ま

つ

て 時 は巾着切 0 仲間にまで身を落 しました が、 今 から五年前

別 て た 女房 つ て、 0 末 期 0 練さ で堅人に生 めに、 翻りん 然と た経緯 て本心に 立ち還 次は り、 何 娘

彼 0 b お 富 知 を つ 引 7 居 取 た 0 です。 神 田 れ 変っ 平

あ る は 美 知 ら ぬ 清 清 純 ら さ、 か に そ 生 れ 11 を見 立 ちま る 0 を唯 た。 親 父 0 に 楽 巾 み 着 に 切 0 兵 衛 が

は 本 に 真 つ 黒 に な つ て 働き つ づ け た 0 で す。

が は 7 嫁 彦兵衛 前 前 お 富 を は そ 待 れ そ ع れ は 修 つ も辛抱 娘 業 て を仕 居 0 た つ 込 b0 しむ 術<sup>々</sup> りで、 で て を た。 何 知 増 0 邪 5 屋 念 な 0 b 女隠 11 な 男 居 親 附 勤 に 0 奉 淋 め 上げ 公 さで さ て せ 帰 た 9

ち 逃 そ 送 が た が ら れ 番 れ お な て が 頭 店な 5 に 0 聞 養 怪 子と 我 寝 か b され bな 勝手 Þ 5 立ち戻 ず 罪 な 待 0 事 遺伝 を つ て つ の恐 て、 て 11 来 る ろし ٤, 三百八 た の で さ 顔 す 十 見 両 知 彦 ŋ 0 兵 大 衛 銭 金 を は 持

でし 我 れ 0 胸 慢 から犇と抱きしめて、 ょ う。 噛じ て、 ŋ 付 平次 彦兵衛 ζ が止 に 定<sup>き</sup>ま は 没義道に つ めてく て居るよう 泣 れな けるだ 戸を閉 け け泣 に れ 思えた ば め た e st て お 0 富が の に やりた で 泣き す。 何 e st 0 濡 ょ 不 れ 自 うな心 然 が 持 父親

彦兵衛 あ 0 照れ臭さ。 の 、 娘を 助 け て 下 す つ た 0 は

「俺だよ、彦兵衛」

た心 らな 浜 の町で堅気 か った、 この 平 に暮して 次もす それにしても、 つ いるとは かり感心 聞 五年前 して いたが、 しま の彦兵衛 お つ たよ 富 の親 とは、 が 打 お 前 つ ع 7 は 知

め る 平次は灯の中 0 でした。 に全身を現すと、 こう心から老巾 着切 0 心 境を

恐れ入ります、親分」

平次は は、 きゃ 「それ な 潔けっ る に い白を見る か ま つけ に e st ても、 巾 届 ·着 番頭 け 切 たよ」 は お前 に やら 何と言 の考え れ た った 0) 間違 違 か 知 11 らな な って *i* 1 (J 11 が、 ることだ 三百 の様 け 八 は言 で、 + 両 わ 金 な

ヘエー

栄や洒落で、 両 捕縄を出して、 玉 橋 か 5 夜中過ぎの大川 飛込 もうとする 欄干へ縛ろうかと思ったくら 0) を、 女づれで飛込めるも どん な に 骨を折 いだ。 つ 0 て 人間 止 Þ め は ねえ」 見

公 増屋 人達に の主 は 嫉<sup>ね</sup>た 一人は、 かも 徳之助 ひがみもあるだろうが、 0 正 直 をよく 見抜 主 ( ) 人 て e s 0 信 ら 用さえ変らな つ 奉

きゃ、少しも驚くことはない――

「ヘエー」

てく 帰 れ るよ りに 7 お 彦兵衛 れ、 く れ と れ は 0 ば、 ポ というだけの話さ。 仲 さア入った入った、 が 口 ポ もう大手を振 <u>~</u> 口 ん ع 涙を に 知 れ渡 ぼ つ お前もよく若 て し つ 父さんは苦労人だ、 て、 江 て居 戸中を歩ける二 りま このままでは し い二人 た。 銭形 横 人 に ょ 言 平 山 で す 次 解 11 町 聞 が 9 0 保 てく か 店 せ 証

人を招きました。 平次は 両 方 へそう言 ( ) な がら、 有 明 月 0 隈ま に小さく な 9 居 る

=

にな 貧 つ た 無 灯 分 0) 別 下 を叱 つ た ŋ を 有なだ 押 め し並 た り べ て、 しました。 平 次と 彦 兵衛 は、 死 ぬ 気

せる 並 三百 ع 気 に 八 つ + な て 両 れ ば は 養子 大金だ 三百 0 八十 が、 お前 両は だ。 増屋 安 0 \_\_ 主人は 生真面 ( ) 資 本 諦き 目 0) よう らめ に 働 な て 13 b て ( ) る 0 身上を じ Þ な 肥 11 公 人 5

ちゃ せ え 三百八十 あ り Þ 声 は 俺 思っ 0 手 か、 で 何と 三両二分も覚束ねえ」 で bする が ح ん な を 居

平

次は

そう言っ

てや

ります。

彦兵衛 は  $\square$  < 惜ゃ が る の で す。 悪 事 に 栄えた昔 0 事を 思 11 出

た

のでしょう。

だ。 正 直 三百八十 者 はそれ 両が が 懐中 本 当さ から消えた後前 ところで、 のことを、 ど  $\lambda$ な 野郎 少 しくなわ が 抜 聞 た ん か

て貰おうか」

持って行くように』 さんが待 まえでした。 相生町のお ってい まっすぐに両国へかかると、 華客で、三百八十両、 て、 『増屋 という伝言です」 の主人が小 小判で受取ったのは 梅ぁ の寮に居るから、 橋の袂でどこ そ か 日よ 刻っ 0 つ 小僧 少し

フー <u>ک</u>

眺 昼前だというのに、土堤は、 ります」 うように、 め 乍が 別に 疑う心 ら行くと、 言問い 持  $\mathcal{P}$ の近くまで な いきなり突き当って喧嘩を吹 向 島 こぼれそうな人出です。 ^ 実は飛んだ儲けの 行 くと、 ちょうど花は真 っ掛けたも つもりで、 その間を縫 つ のがあ 花を り、

どんな野 郎 だ e s

小鬢の禿げ上 彦兵衛 は 横 合 が から つ た、 П を出 薄あばたの男で」 しま

「二つ三つ殴られ て、 土 堤 の 下 ^ 転がされ ると、 そ 喧 だ ッ

という人だかり」

どこへ逃げたか 「ようや く ハ ネ 退 わ け か りません。 て 飛起きると、 ハ ッと気が付いて懐中を見ると、 相手は・ 人混みの 中 飛込んで

三百八十両 0 小 判を入れた財布 は、 紐を切られて抜かれてしまっ

たの す

あ 野郎、 や りや が つ た な

彦兵衛は思当ることがあるらしく、 拳<sup>げ</sup> 固こ で鼻 の頭を撫で上げな

がら、 詰 め 寄りました。

気 那 りました」 が 逃げたか が び 付 ح つ こへ来て と り 私は して、 影も もう、 e s 形も ると 気違 あ 死 ( ) 11 う ん りませ のように でお詫っ のは 真 ん 駆 びをするよ つ 赤 小 け な 梅 廻 嘘、 り 0 寮 ま ょ り ^ 行 たが、 外 くよく に思案も って見ると、 、企まれたと 相 手 なく 旦

したが 言 町 H 0 方 の か 向 れ つ た るま  $\epsilon \sqrt{}$ て 0 行 で死 お で す りま つ て 場所をさが も花見客で た。 お 富 し に逢 パ て、 イ、 あ って つ ちこ 一と言、 日 が暮れると足 つ ち歩 別 きま れ の言葉が は 横 山 ま

れ 深 徳之助 ( ) 姿で 0 す。 肩 は ガ ク IJ と落ちて、 鬢な の ほ つ れ *\$* 白 11 頬 P あ わ

忍 り 11 る 裂けるよう して下 気が 緒 に しませ さい。 死 0 で う した。 と言 お父さん e s まし でも、 たの 一人のこ 徳之助さん は、 ح して死 0 一人殺、 私 で ぬ して、 た。 と思う お ٤ 父さ 私は生きて 胸が 張 堪

ば、 後ろからお富 馬 鹿 な ッ。 伸した 親 父を 手は つ かまえて、 そ つ ٤, 惚る気は 父親 を 0 聞 膝 か 小 僧 せ る ^ 奴も

彦兵衛 は はふ り落ちる 涙を、 横なぐ ŋ K 払 9 歪が ん だ 笑 11 を

ッ、

ッ

絞り出 ろ てお で ります。 彦兵衛。 そ 0 巾 着

ŋ

りそうだが 平 次は職業意識を取戻しました。 切 0 |薄菊石 を、 お 前 は 心

とお顔を」 それですよ、 親分。 若 い者には聞かせたくねえ話で、 ちょ 11

彦兵衛は 目顔に物を言わせて、 滑るように 明 け か か つ た 街 ^ 出

ました。

立って、 廻したら、 「彦兵衛 そ れを追 銀鼠から桃色に明けて行く大川端 金が戻るかも つ 薄菊石の巾着切は誰だ。 て 平次。 二人はしばらく無言 知 れ ねえ 早 ( ) 方 の春を眺め が のまま、 *( ) c y* て 浜 今 お 町 か 河 ら手を り ´ます。

平次は口を切りました。

顏 描き菊石の東作という野郎 の具で菊石を描くほどの用心 で、 深 仕事をする時 W 奴ですよ」 だ け 自 分

「どこにいる、 少しでも早い方がいい」

ね 親分さん、 これはあっしに任せて下さい ません か

けます。 ことがあります。 十手捕 ح 縄 ( ) じ つはあ ゃ 彦兵衛が一世一代、 そんな事を言っちゃ悪 つ しに任 して お 6 身体を張っ なさいまし」 e st が、 てき 後 0 つ よく と型をつ ねえ

彦兵衛は思い切ってこう言うのです。

と平次。 どうしたわ

げだ」

描き菊 はあ 知 ることも出来ません」 増屋 りませ 石を洗 居 の嫁になろうという娘 り ´ます。 ٨ って居た日には、 ح それにあの東作の仕事振りを、 れは企みに企んだ上のことで、 の耳に、あっ 親分が踏込みなすっても、 しの素姓を知らせたく、
・
は
によう あ、 金を隠 つ しはよく どうす

ません に 曝さ そ 憫じゃございませ な されて、 れ の時は手前が活証人にな と 仰 相 対死を助け Þ 娘は死ぬ れ ば ん な ほど焦い か、 りま て貰 ずが、 親 分 っても、 れて ってくれるだろう。 *\$* そ の 増屋の嫁に りあ 人死をさせちゃ つ なれ の なア、 素姓 つ は 彦兵衛」 明るみ は 反な あ つ て

生 なさい。 た上で、 三百八十 度 0 ね、 お 菊 両 願 石 親分 0 0 いでございます」 金を取り 東作を縛るなり 銭形 り戻 の親分さんを見込んで、 徳之助とお富を無 吅 < なり、 勝 手 に この彦兵衛が な 事 す に 増 つ 屋 て お に 帰

11 つ 間 に Þ ら彦兵衛は、 朝 0 大地 の 上 に 崩ず 折ぉ れ て 銭 形 平 次

を拝んでいたのです。

改心を見届 ょ 判 つ た。 け た平 たっ 次があ た三日、 の 可 日ち 愛ら 限が を 切 11 娘 つ て ^ 待 0 つ 産 て Þ 代 · ろう。 ŋ だ 手 前

「有難うございます、親分」

よ 俺 は拝まれる 0 は あ ん まり 好きじ Þ ね え 大変な 泥

だぜ、仕様がねえなア」

埃を払 平次は彦兵衛 って Þ りま を起 した。 してや って、 そ 0 胸 か ら膝 ^ 面 に 附 11 た 土っ

れ を遠巻きに見 う 出 始 め た 街 7 居 0 人達、 る ので した。 酔 つ 払 11 0 介 抱 とでも 思 つ た 0 か そ

四

田 原 町 の 経師屋東作、 兀 + 年輩 の気 のき 11 た 男です が、 れが

危なく

若

い二人、

身を投げるところよ」

描き菊石 の東作とい われた、 稀き 代い の兇賊と知る者は滅 多に ありま

せ

そ の 奥 0 思 11 の 外贅を 尽した ع 間 に、 主 人 0 東作 کے 左 官

0 彦兵衛 は 相 対 ま た

振 ŋ だ ね 彦 兄 **₹** 眼と 鼻 0 間 に 住 ん で 11 て 4 稼ぎ 業。 が 違

うと、 こう P 逢 わ な 11 もの か

東作 は渋 ( ) 茶 杯 淹い れ る でも な 11 冷 た 11 態度 で 少 し茶 か 加

減 う言 う 0 で た

お蔭で 地道な貧乏暮し b 四 年 ع つ づ e s た が 今 日 は ね 東作

少し お 願 11 があ つ て来たん だが」

彦兵 衛 は 居 心 地 が 悪そう にモジ モジ し な が ら、 思 11 切 つ 様 子

で切 出 しま した

テネ、 堅気 の お 前さん か 5 0 頼 み、 ع 11 うと、 袋戸 棚 0 唐ら 紙み

でも 貼 つ て 貰 4 た 11 と言 う 0 か 11

東作 は 煙草盆を引寄せて 服 吸付 け ` 長<sup>の</sup>ど 関か な煙を長々 と吐きま

た。 プ ン と高貴な、 国さ 府ぶ の薫 ŋ

ゃ ね え。 昨 H 向島 で 抜 11 た、 増屋 の 息 子 の三百 八

何を言うんだい 、彦兄イ。 向島だの、三百八十両だのと 俺は

0 もう悪事とは縁切りさ。 兵 衛 لح 同 ように通 三年前から堅気になっ 用する経師屋 の東作だ。 て、 可ぉ 怪ゥ 近頃 で は 左官

言 つ て 貰 e s たく な (J ね

ら、 き 菊 そうでも だ。 あ あろうが の三 百八十両 東作 を 抜 俺 か が れ 聞 た ば 11 た か 手 ŋ П に は 昨 昔 夜 は 0 まま 両 玉 0 描か

人は彦兄 1 0 娘お富さんとか言った ね

きっ 誼し ob マ と恩に そ れまで の三百 被き る 知 八 っているなら、 + · 両を、 この彦兵衛 言うだけ野暮だ。なア、 の顔に免じ て返 東作、 てく 昔の

そ れ じ bÞ 彦兄イ 本気 この通 本気でそん りだ。 娘 0 な事を言 命 にも 関かか いに わ 来た ること、 0 か 愚に 返

つ た

彦兵衛が一生 の頼みだ。 聞 e st て く れ、 東作

彦兵衛は 両手を畳 に下ろし て、 涙ぐ  $\lambda$ でさえ居た 0)

Þ , 兄

が つ 11 たな」 やさ彦兵衛。 年 0 せ ( ) か は 知らねえが、 大層手前! はボ ヤ ケや

東作は 銀煙管を逆手構 に ` 火鉢を小楯に に 取 いって吃い となりまし

東作

頼む」

だろうが、 は だろうが、 東作 ねえ仁義だ。 東作、 勘弁 稼せ 巫ふ いだ金をそ ね 山戯た事を言やがると、 安く えぞ」 て貰 つ e s < た ŋ く 返せと ねえ。 いう 彦兵衛だろう 昔 は 0 悪 党 は 仲 ح 間 ち が 0 ・朴念にん 兄 イ

解 つ たよ、東作。 手前の腹を立 てる のも 無理 は ねえが、 俺

方 にも 少 しばか り言 いてえことがある

両抜 娘 0 命 e st を た 助 0 けた は 描き菊石のは、他に 0 東作と話すと ね 銭形 0) 平次親 分だ。

じゃ

え、

三百八

何

一両は、 ま ア、 見事こ 待 つ てく の彦兵衛 れ。 俺 が賞 は 生 つ 一懸命 て来るからと、 平次親分をなだめ ようや く引取 て 三百八 って

貰ったのは、ツイ先刻だ」

舌<sup>ベ</sup>って そ しま ゃ つ た 手 前 0 か 銭 形 0 平 次に、 ح 0 俺 0 事 までベラベ ラと饒い

怖です た。 東作 銭形平 は 力 次 ン に 力 睨 ン ま に 腹を立てな れ ることは、 が らも、 悪党仲 襟元 間 に 取 0 薄寒さを つ ても 致命的 感 ま な 恐

三百 度のことは 娘 0 + 命 両 を 眼 助 0 を 金 け を返 たさ つぶ つ し 0 行きが て貰う工夫もあるだろう。 てく れさえすれ か りだ ば、 さ 平 れ は仕 次 親 なア 方 分 が に 頼 あ 東作」 る ん で、 0 か

「御免蒙ろう」

何?\_

岡 つ ·引に脅き かされ て獲物を吐き出したとあ つちゃ、 の 東作 0

名折 れだ。 今すぐ長 い草鞋を穿くまでも、 そ e s つ は御 免蒙ろうよ」

「どうあってもか、東作」

4 やに東作、 東作 つ て言やがる じゃ な *( )* か 0 誰 が 何と言 つ ても

嫌だよ。判ったかい、彦兵衛」

野郎ツ」

人は 睨 み 合 11 まし た。 争 闘 を始める 瞬前 0 猛 獣 のように

飛んだいい気合だよ、彦兄イ」

ハ

ッ

ッ

ハ

ッ

ハ

ッ

ハ

ッ

年は

取

って

P,

娑ゃば

つ

気

は

抜

け

ね

急に 笑 11 出 た東作 の 顔を、 彦 兵衛 は 眉 P 動 かさず に 睨 み 据え

「三方。

0 三百 では な 八 11 が、 両、 そ 事と次第によっ 0) 代 り、 礼はするだろう て は、 ず 4 な、 ž 6 彦兄イ 返 してや 5 な 11 P

礼 ? それはするとも、 そ の 日暮しの左官には、 どうせろ

な b出 来な 11

彦兵衛 は 緊張 が 緩る ん で、 思 わず 肩を落しまし 相 手 0 様 に

妥協 的 な b0 を読 ん だ 0 で す。

礼 と言 つ たところ で、 銭や 金 じ Þ ね え

徳之助 人を諦めさせて、 俺には  $\boldsymbol{b}$ 少し 無 事 望みが 1増屋 お 富をこの東作の女房にく に あ るん 納まるだ だ。 ろう、 外じ お富とはどうせ ゃねえ、三百 れる気は 八 + な な 両 4 61 返

な、 何だと」

東作 は 大変なこ とを言 11 出 ま た

Þ それが るまでよ。 嫌なら、 江戸で指折 増屋 へ乗込ん 0 大ぉ 店だな が、 で、 手前 巾 着 切 の素性を皆 0 娘を嫁 に ん な す る バ ラ か て

ح 4 つは面 白 e s ぜ、 な 7 彦兄イ

手前それは正気で言うの か、 東作

年 は 正気も正気、 少し 違 うが、 ح の通り、 まだ厄前の っても寝ぼけても居るわけ 東作に、 九 0 お富が 不 釣 合 ねえ。

わ さねえ。 巾 着切 0 娘 が 巾 着 切の 女房、 こんな似 合 4 0 縁が

 $\boldsymbol{b}$ 0 か

野 郎 *ッ* ∟

ま ア、 怒るな、 彦 兄イ。 俺 は二三年前 か 5, お富坊に 眼を つけ

て居たん だ、 の縁談さえ承知なら三百八 + 両 は 結納 代がわ り、

熨斗をつい け て差上げるよ」

東作 の太なななる しさと、 そ のたくら み の深さに圧倒され て、 彦兵衛 は

ゆ 眼 に宙を見たまま、 血 の出るほど唇を噛みました。

事情 と 浜 を 町 よう。 知 0 ら 家 な で は 11 ながらも、 お 富と徳之助が、 何やら吉報らし 平次に言 りも i s 宥められ のを待っ て ながら、 いるこ

五

を 人 残 し て、 徳之助だけ 店 帰 す 0 は、 彦兵 衛 0 方 で は

不ふ ·可能な ことで した。

て 死 0 もう 一歩手前まで行 瞬も 側を 離 つ た二 れ よう 人 とは は、 恥 な b 外 か 聞 つ P た の 義 で す。 理 b 面

留 提 られて、 たとして、 幸 め 1, る のが 増屋 灯の入る頃、 穏当だろうと しばらくは の主人三右 世 徳之助はようやく横 間体を兼ね 衛 ( ) うこ 門 からの伝言で、二人を一緒 とに なり、 て、 お富 山 迎 町 は 11 浜 に ^ 帰る 来 町 た 0 気 父親 手 に 代 に す な 0 許 連 る ŋ 前 ま

きゃ、 お富、 事は、 親類方や古 若 旦 那 い奉公人の手前、 は お 店 ^ 帰 った 増屋 が、 三百 0 跡 八 取 ŋ 両 K 直 0 金 る が 0 が 戻 むず

改 め て彦兵衛 は、 娘に 因果を含める 0 で

か

( )

お前に

も判るだろうな

た。

そ れ い は 併 が 何 の前 提やら父親 の 気 持を 測が ŋ 兼 ね て、 お富 は 美

瞳を挙 げま た。

か 6 増 屋 から追出されて とお前は思うだろうが、 Ŕ 裏長屋に住 それじゃ世上 んでも、 二人 の義理が済まねえ」 緒に暮せる

男 の 出世を妨げ る 0 は、 何と言 つ 7 Ъ つ れ添う 女 0 恥 解 る

か、お富」

え

「それ が解 るなら、 今晩ほん の しばらく、 厭ゃ な客に 附き合 つ てく

-三百八十両の手土産を持って来る客だ\_

「お父さん、それは?」

の通り巾着切 りの東作と いう 男だ が 深 11 わ け が あ つ て、

表沙汰 にしたくな e st のだよ。 判るか、 お富」

子供 の時 別れ て 五年前母親 の臨終の床で、 久振 り に 逢 つ た父

ですが、 それ か ら Ŧī. 年 0 間 の愛育は、 世の常 0 Ŧī. + 年 0 恩

超えて深いものでした。

世にこんな良 父親があ ると いうことは 子とし て、 何 ع 11 う 誇に

らしいことでしょう。

お富 は何時でも、半白の鬢 か 5 後光が射すような心持で、 父

親彦兵衛を見て来たのです。

お 父さん、 私には 何 に b 判 ら な 11 け れ ど、 父さん が 良 11

思うことならどんな事でもや ってみましょ う

描き菊で お富はそれほど父親を信頼 石た 綽だ 名な ある大悪党が し切っ 押掛 て居た け 聟 0 に来るとは元よ でした。 経 師 屋東 ŋ 作、

由もありません。

間 もなく 東作が 町 '駕籠 で乗込ん で 来ま た。

爺さ 酉む だ、 早過ぎ は な 11 だろう

さすがに 極 り が悪 か ったも 0 か、 少 し面を冠 って、 笑み割 れた

頬が、 とろけて落そうな 0 も不気味です。

「まア入んな、 お富、お富、 俺の古馴染の東作さんだ。 挨拶を

するがいい」

狭 *( )* 逃げも隠れもならぬお富は、 行<sup>あんどん</sup> の蔭に小さくなりま

した。

お富 坊、 相変らず美し いことだな。 今晚 か ら俺はここ 0

お前とは――」

ッ、余計なことを言うな。 若 い者はび っくりするじゃ な か

た東作を説き落して、 てから、改めて盃事をするとして、 彦兵衛は精 杯の眼顔を働か お富との祝言は、 せます。 今晩はほんの見合だけ どうしても承知 いずれ徳之助と縁が切れ しな غ

う事で話をつけたのです。

ても、 つけな 両 ツ、ヘッ、 0 俺 金 ( ) b は日本 は ちゃ ので もな んと此 ヘッ、そう言ったものかいなアお富坊、 の親切者さ。 4 処に持って来たよ。 なアお富坊、 お富坊に気に入るように、 今晩にもこの俺 次第によ つ ちゃ の こう見え 熨の  $\equiv$ 女房に 百 を

な垂 れ か かる四十男 0 醜さ、 お富はゾ ッ と寒気が 父親

の背後に逃げ込みました。

なる気

は

な

11

かえ」

お富 あ れほど言 つ て置 いたじ Þ な e st か、 酌を を して上げな」

ーハイー

のうちに なア、 東作。 はお富も、 夜は長げえ、 と晩経てば、 まず御輿を据えて飲むが と晩だけ年を取ると e st , , 11 うも そ

っ の だ し

らねえぜ、 その 代りお互 から お富坊の酌で飲むなんて、 と晩年を取るぜ、 ^ 俺は三年越夢に ッ ヘ ッ。 だ が、 見た図 全 く 堪 ま

だが、 昨日までもこんな幸せにあり付こうとは思わきのう な か つ

「だからよ、存分に飲みな」

「介抱はお富坊に頼むか、ゲープ」

を救 叱か 5 東作 う は鯨 て、 方法と聞 観 のように 念 かされなか 切 飲みました。 つ た手に ったら、 銚子を挙 逃げ どんな げ 腰 る 0 お富 に父親が 0 です。 は、 引止 彦兵衛 ح れ め が 徳 之助 眼 で

酉む 刻っ か ら 亥刻まで、 呑んで、 呑んで、 東作はとうとう正 体 を 失

いました。

ろ

で、

四半刻とも我慢をするお富ではな

か

つ

た

でし

ょう

ら、 11 行ね 燈ん 塩ある を 梅い 退ど に か 眠 せ つ た る にようだ。 0 だ お富 枕 を持 つ て来な、 そ れ か

黙 って行 燈 を 退の か せ 杯盤な をざっ と片附 け て、 お富 は 部 屋 0 隅

にふるえております。

驚くことは な *( )* 少し 静か に したら、 よく落着くだろう」

飛 んだ獣 附 合 11 さ せ て、 気 0 毒 だ つ たな ア。 お 富 そ 0 り、

この跡始末は俺がしてやる」

彦兵衛 は 乱 酔 て 正体 b な 眠 りこけ た東 作 0 側 膝行り 寄 ŋ

ました。

「お父さん」

さ で、 お富は 何 思わず声を に b 知 5 ず 出 に 眠 ま つ 7 た。 11 る、 父 親 東 作 の 手 0 懐 が 妙 中 物 ス 馴 ル れ ス た ル 滑 らか

て行くではありませんか。

抜か れ た物を抜くまでのことだ。 驚 く ことは

な

11

ズルズルと抽出したのは、 蛙を呑んだ蛇のように、 恐ろしく脹

らんだ胴巻。

「ウ、ウン、ウ、ウ」

うなされたように、 寝返りを打つ東作。

彦兵衛 の右手には、 キラリと匕首 が光りました。

「お父さん」

大丈夫だ、 心配するな。 こんな毒虫は、 人 助 け 0 た め に 命 を 取 つ

ても仔細はないが、 俺は卑怯な人殺しはしねえ」

お前はそ の 胴巻を持 つ て、 横 山 町 0 増屋 行 つ てく 'n 此

処にまごまごして居て、 この野郎が眼を覚すと、 後が面倒だ

「お父さん」

手触りでもよ 解 る。 中 は 確 か三百八十 声。 少 重 11 が、 男

人の 命にも関わ った金だ、 しっかり持って行け」

胴巻を娘 う子刻 近 0 帯 11 で 0 下 よう。 ^ 廻しながら、 街は灰を撒 彦兵衛はそう言い続け いたように鎮まって、 、ます。 朧 月 うづき

の精のように、 ヒラヒラと飛んで来る花片。

**゙**父さん、それじゃ」

お富は三百八十両 0) 小判を背負って、 歩真夜中 0 街 ^ 踏出し

ました。

「命がけの金だぜ、お富」

「ハイ」

これが暫く 0 別れ になろうも知れ な

看「お父さん」

お富」 「なアに、 そんな事があるものか。 明日はまた逢おう、 *( )* いか、

六

に、 ましたが、 、動物のように乱酔した身体を横えた東作を、娘を夜の冒険に送り出して、引返した彦兵衛。 いきなりハタと枕を蹴って、 引返した彦兵衛。 憎々 行燈の灯りの中 く見詰め

「野郎、起きろ」

いが、 圧し付けるような声を浴びせました。

「ウ、ウ、ウ」

を覚しそうもありません。 ゴロリと寝返りを打った東作、 それ位のことでは、 なかなか目

©2017 萩 柚月

0) 酒 だ と思 つ て、 よくも食 ( ) やが つ た な、 畜生 ッ、 どうする

か る が

満 勝 々 手 水を か 5 湛た 持 え 出 した手桶、 た 0 を 持 つ て、 井戸 端 東作 ^ 行 0 枕元 つ て二た に 突 釣っる つ 瓶べ 立ちまし ま で 汲 た。 み入 れ

垢ご 離り を 使 わ せ て Þ る、 驚 な

0 眼 々 ^ す。 鼻 と持ち上げ П ^ た手桶から、 13 Þ 顏 も襟 F P 胸 ッ と — 上 条 半身 0 飛ばる 湯 ぱ 熟 11 に 睡 ブ チ た 東作 まけ

ワ ッ、 な、 何 を し Þ が る

た

0

で

ガ バ と飛起きた東 作

騒ぐ 家は 借 家 だ。 望みと あ ら ば、 もう二三杯 食 わ せ p

や、 胴 巻を 抜きやが つ た

手桶を振

り

冠

つ

たまま、

彦

兵

衛

0

啖<sup>た</sup>んのか

は

虹

を

掛

け

ます

うか」

立ち上が つ て自 分 0 物懐中を捜 つ た 東作、 さす が K 酒 0 酔 11 b 覚

な

め ま た

当 ŋ 前ぇ ょ 油 断 を た 懐 中 か ら 抜 0 は 巾 着 切 手 柄 だ ざま

見 が れ

爺じ 奴がぬ 一杯食 わ せ た な

腐さ つ た給をかい な ぐ ŋ 捨 て ると、 逞な ま 15 つ 赤<sup>はだ</sup>れ 東 作 は

行 燈を 小こ ·楯に屹 と身構えま す。

たま 金 b 抜 だ。 0 11 て娘を か 弁 天 少 様 は れ 0 と抜か ょ 目 う が 覚 な め 娘 たか、 を、 P が そ つ た 馬 ん 鹿 な。 な 野 モ 郎 手前え 七 ン ッ ガ は 江 T 戸 0 餌 0 巾 着 切 7

そ 0 娘を、 ヌ ケ ヌ ケ と増屋 0 嫁 に する気だろうが そ 6 な 甘 11

わ け 行 P

俺 方 で  $\boldsymbol{b}$ 前を銭形 0 親 分 に 引 渡 す筈だ が 昔 0 縄

を打たせ ち Þ 気 の毒 だ

何を、 老 ぼ れ

は二挺の・ 何方も 抜き差し な ら ねえ 破は 目め だ。 仲 間 0 仕 ŋ は ん な 時

匕首に物を言わせる 外 は ねえ

何?\_

さ そ 11 を 持 つ て 柳 原 0 土ど 一堤まで 来 11 地 獄 0 旅 何 方

が先に踏出 す か

ガラリと 投げた匕首 行 燈 0 影 か ら手を 出 東作 は あ て

て 挺を 拾 11 ま した。

しゃら臭え、 来 ッ 爺 奴

は 独り 0 如 朧 月 が ぼろづき 街に 飛 び 出 た 0

X

X

ません 助 十 両 0 を 取 か 5 相 り 返し 一 と 月、 続 たの は、 江 お 富 戸は青葉 彦兵衛 0 祝言 お 0 風がま 富 に 0 親やな ぶる頃 今 とな は 0 手 文句を言う 柄と りました。 判 つ て 三百八 徳之

れ た 主 が 人は 左官 最 改 の彦兵衛は仮親を立てて 自 後 それ め 分 に て を世間 は 正 素 折 定 姓 れ 0 が 輿入 並 て 知 出 の遠慮と思 れ て れ た に 時 な 貰うように、 応増 0 り 用 ま 4 心 込 屋 だ ん た 0 で、 親 った 戚 反対 強た の 養 で つ 女 て ع 続 主 ょ う。 披な露っ け 張 屋 た そ

は 4 よ徳之助 とお 富 の祝言 ح 4 う 日

浜 町 0 貧 11 父親 0 許 暇乞に 来 たお 富 は、 近所 0 達に包

囲されて、 しばらくは、 祝 e st の言葉と、 **羨**り 0 感動詞と、 あら

る 目 出 度 b 0 0 渦 0 中 b み 抜 か れ ま た。

「まア、何て綺麗でしょう」

「お富さんは本当に仕合せねえ」

「時々は浜町へもいらっしゃいな」

そんな言葉の  $\dot{\Phi}$ に 盛せれそう た お富と、 相変らぬ布子 枚 の彦兵

衛は、 唯おろおろするば か り で した。

「それじゃ、お父さん」

やがて傾く陽、 お富は尽きぬ 名残を惜し みながら、 店 から 廻さ

れた駕籠の中に納まりました。

「お富、達者で暮せよ」

戸 口まで送って出た彦兵衛 0 眼に は、 涙が光って居 ります。

お父さん、 時々 は横 山 町 へ来 て下さるでし ょ う ね

お富 一は美し 4 髪を気 にし ながら、 駕籠 0 中 から 顔を 出 咲

き立て の花のように、 四方の空気を匂わせます。

「行くよ、 行くには行くがな、 親父がは 娘の嫁入先 ^ ゥ 口 ウ 口

のは、 あまり見 つ とも 11 11 bのじゃ ねえ」

「でも、お父さん」

「心配するな、 時々 は お 前  $\boldsymbol{b}$ 顔 を見せてく れ。 言うま でも ね え事

だが 夫を大事 御主 Þ 御 隠居 によく 仕える のだよ

「ハイ」

やれや れ れ で 俺 も安心だ。 死 ん だ お つ 母 ア ₽́ さぞ喜 ん で

いるだろう」

「お父さん」

駕籠は上がりました。 親と娘を隔れる て る、 町 0 女房、 娘達、 美

華な Þ かな夕陽 の中 に、 あや か りも の の駕籠を、 何処までも追い

ます。

それを立ち尽し て見送る彦兵衛

つ て半 白 0 頭 を 振 りま た 涙 は ポ 口 ポ 口 赤銅色 頬を

伝わっ て、 土間 0 土 < れを 濡 ら します。

そ つ と肩 に手を置 一く者。 振返ると、

彦兵衛」

銭形平次が立って居るで はあ りませ ん か。

親分」

お慈悲 は 過ぎたぞ、 の 上 0 お 目 ぼ は、 役 人 方 の 度

になる」

覚悟は 出 来 て 居 ります、 親 分

彦兵衛 は 静 か に 後 ろ ^ 手を廻 ま

「経師屋東作品 殺 0 下手人、 神 妙 K せ 4

親 分、 有難うございました。 お 陰で 娘は、 何 に b 知らず あ

0 通 ŋ

街 の 夕 陽 0 中に 薄 れ 行く ·駕籠、 それを見送っ て、 彦兵衛 は 声も

な く泣く 0 です。

笹野様 0 御 慈悲 だ そ れ bれ  $\hat{\boldsymbol{\ell}}^{\circ}$ さ ア 立て

親分、 0 彦兵衛が 最後の願 11 ` もう つだけ 無理 を聞 11 7

さい」

私 の居な お 願 11 だ、 11 のを不思議に思 親分。 あの娘には、 ったら、 何に も知 亡かかあ 女の菩提を弔うたよれらせたくはありよ りませ め 西国 ん

26

巡 礼に出た とそう言って置いて下さい」

彦兵衛 は 自 分の襟に深々と顔を埋めます。

でも持て余した悪党、 いとも、 この一埒は笹野様も御奉行様も御存じだ。 それを害めたところ が出来る頃までには、 で、 手で大前えし た お 東作 が は お

の旅から帰って来られるだろうよ」

はあるめえ

お富に初孫

P

西

玉

親分、 何にも言わ ねえ」

彦兵衛 は崩折 れま 合 せ た手が 顎ざ の 下 涙 濡 ワナ

ワナと顫えます。

見 つ ともねえ、 そんなも 0 を引込 め ろ

ヘエ

起る街 後ろから来た の飲みしま、 八五 花 嫁 郎 0 は、 駕籠を見付け あ わ て て た、 捕 縄を 子供達 引込 の声 めました。 で しょう。 つ ع

(編注)

ます。 作品中には、 底本のままとしました。 なる古典的な文学作品でもあり、 が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 身体 の障害や人権に ご理解、 ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

挿絵-萩 柚月

初 出 「オー ル 讀物 臨時増刊 皇軍慰問全集」 文藝春秋社

昭和十三年四月十五日発行

底本 月三十日初版 銭形平次捕物全集」 第四巻 河出書房 昭和三十一年六

編集・発行 銭形倶楽部

28



## 銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/